

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 運動会の前日はしっかりとキウソクを取る。
- ② 女王ヘイカが演説を行った。
- ③ 試験で全教科満点を取るのはシナンの業だ。
- ④ 手紙にジコウの挨拶を書く。
- ⑤ 店員の対応の悪さにヘイコウした。
- ⑥ 生糸で有名なこの地域はヨウサン業が盛んだ。
- ⑦ リーダーから決定権をユダねられた。
- ⑧ 努力がムクわれ、よい結果となった。

問二 次の四字熟語について、間違っている漢字を一字ぬき出し、例にならって正しい漢字に直しなさい。

(例 絶対絶命 誤⇨対 ↓ 正⇨体)

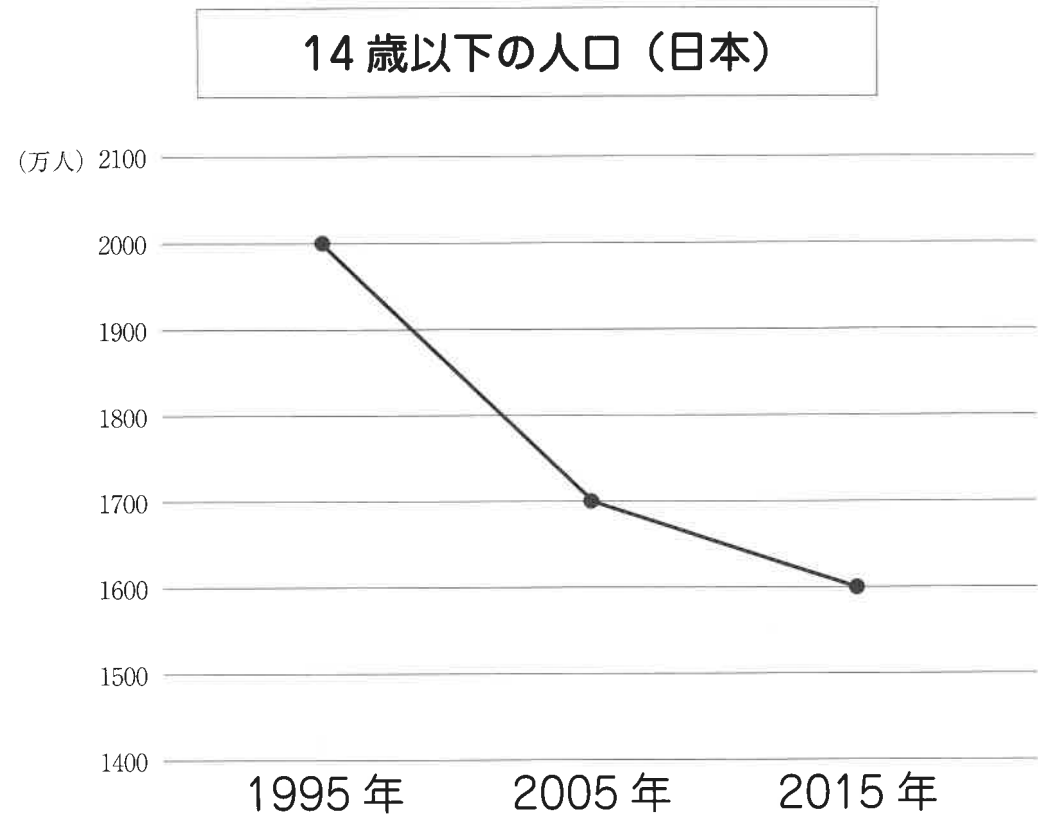
- ① 自我自賛
- ② 起死快生

問三 次の各文の――部が直接かかる部分を例にならってぬき出しなさい。ただし、句読点はふくみません。

(例 赤い リンゴがある。 解答⇨リンゴが)

- ① 彼女は 小走りで 家で 待っていた 愛犬の もとに 駆け寄った。
- ② たいてい 私たちは、映画で みる 奇跡など 一生の 中で 絶対に ないと 思う。

問四 次のグラフ中の日本の十四歳以下の人口の変化に着目し、そこから読み取れることを一つあげ、四十字程度で書きなさい。その際、(注意事項)の1・2にしたがうこと。



【(資料) 総務省「平成 28 年版 情報通信白書 人口減少社会の到来」をもとに一部改変

(注意事項) 1 文の主語を明らかにすること。

2 数字を表記する際、次の例を参考にする。

(例 千七百万人 一九九八年)

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 若者の理科離れが言われるようになって久しい。小学校時代は理科好きであったのが、中学生頃から敬遠(けいえん)するようになり、高校に入ると多くの学生が文系を選び、そのまま理科(科学)に縁(えん)がなくなってしまうのである。これにはいくつもの理由がある。小学校では自然観察など実体験が重視されているが、中学になると受験のために理科は暗記中心になり、面白味がなくなってしまうこと、小学校の先生の六割が文系出身者で適切な指導ができないこと、理系出身者は将来の出世や給料が不利になっており、社会で重用(ちゅうよう)されていないと感じていること、そもそも大人が科学に関心を示さず敬遠していること(大人の理科離れ)、などが挙げられる。科学の祭典やサイエンス・フォーラムなど官民あげて科学への関心を喚起(かんき)しようとしているが、その場限りの催(もよお)しで終わっているきらいもある。そう簡単に直せる状況ではないのである。その結果、科学者と「素人」の間の溝(みぞ)がますます深くなっている。

② その大きな背景として、文系と理系の分離という現代文明が抱える問題がある。既に、一九五九年にC・P・スノーが「二つの文化と科学革命」の講演で論じたように、文系と理系の亀裂(きれつ)は早くから始まっていた。スノーは、理系人間はシェイクスピアを知らず、文系人間は熱力学の法則を知らない、それぞれか、むしろそれを誇りに思っている状況を嘆いたのである。そして、その根源に教育体系に理系文化がきちんと位置づけられていないことがある、と論じている。この指摘は、現在においてもいっそう有効であり、より深刻になっていると言えよう。高度知識社会に移行するにつれ、法律や経済を専攻(せんこう)する人間の方が優遇(ゆうぐう)され、若者の指向もそれに靡(なび)いていくすう勢(せい)がより強くなっているからだ。それでは科学の「素人」を増やす一方なのである。

③ 科学の成果を堪能(たんのう)しながら、科学については無知同然であるという現状をどう克服(こくふく)すればいいのだろうか。I、そのことは科学者に対してとも言えることで、専門の事柄(ことば)は深く知っているくせに、一步専門を外れると赤ん坊(あかちゃん)と同然である。そして、そのことに気づかず、いかにも何でも知っているかのように振る舞(ま)う科学者を、オルテガ・イ・ガセットは「科学主義の野蛮性(やばんせい)」と呼んだ。科学の振興(しんこう)と言えは誰も拒否(きよひ)できず、王様のような態度で世の中を見つめる科学者の野蛮性を弾劾(だんがい)したのである。

④ この状況を憂(うれ)いて、文理融合(ぶんりゆうごう)とか文理連携(ぶんりれんけい)と言われることが多くなった。今や、理系の知識を使わなければ法律も経済も歴史も論じられず、文系の知識がなければ科学の哲学や方法や倫理(りんり)を考えることができない、と理解されるようになってきているからだ。(中略) 科学者と文

系知識人との亀裂が大きくなったことも反省材料になっている。とはいえ、日暮れて道遠しで、掛け声は大きい但实际上は何も進んでいない。使う言葉の差違、価値観の相違、方法上の齟齬、概念の食い違いなど、そう簡単に文系と理系を分断する川に橋がかからないのである。(中略)役に立つ科学指向が強くなり、文化としての科学という香りを失いつつあることも原因だろう。

⑤ とはいえ、市民が科学にまったく関心を失っているわけではない。二〇一〇年、七年に及ぶ飛翔を終えて戻ってきた「はやぶさ」の快挙に、実に多くの人々が拍手を送ったことがその例証である。数々の故障や不具合が発生したにもかかわらず、それを克服して無事地球に帰還して燃え尽きた姿が、空翔る宇宙への憧れ、辛苦を乗り越えての成功、研究者の粘り強い努力など、人々の夢とロマンを刺激したと思われる。

Ⅱ、本当に科学への興味が高まったのかどうか分からない。単に、人々は、さまざまな困難を乗り越え、最後にはハッピーエンドになる「物語」を求めていただけなのかもしれないからだ。これに共通するのは日本人がノーベル賞を受賞したときで、子供時代からの秘められた努力や刻苦勉強が強調され、その結果として素晴らしい業績が挙げられたという幸福談に仕立て上げられる。やはり人々は、科学そのものの話題ではなく、科学を巡る「物語」を待望しているのではないだろうか。

⑥ このことから、科学者と「素人」との乖離を修復する一つの方法は、科学の「物語」を回復することだと思われる。新聞各紙には科学欄が充実し、最先端医療や新発見の話題が取り上げられるが、そこではそれらがいかに関に役に立つかわかりが強調され、いかにも明るい未来があるかのように描かれている。科学ジャーナリズムの仕事は、科学の成果の宣伝にあると思ひ込んでいるようである。

Ⅲ、市民は未来への空手形ではなく、人間の営みとしての「物語」を求めていると考えるべきなのではないだろうか。それは市民の科学リテラシーを涵養することに直接つながらないように見えるが、科学との距離を小さくし、科学をより身近にすることにつながるだろう。日常の会話の中で科学者のエピソードが語れることが、科学の中身にまで話が及んでいくきっかけとなるからだ。

⑦ もう一つ、科学者と科学の「素人」との間に齟齬があるテーマとして、宇宙人の存在について、科学者の意見は、「この広い宇宙なのだから、宇宙人はどこかにいるに違いないが、地球にやってくるとか、宇宙旅行で遭遇するなんてことはあり得ない」が最も一般的だろう。それを端的に表すのが「フェルミのパラドックス」である。物理学の天才でノーベル賞を受賞したエンリコ・フェルミが、昼食の席の世間話で、「宇宙には沢山の生命体が存在し、知的生命も多数あると考えられるのに、なぜ地球にやってきた痕跡がないのだろうね」という疑問を提示したのである。

⑧ 天文学者は、私たちが住む銀河系には一〇〇〇億個もの星が存在し、一〇億個の地球のような惑星が付随していると考えている。そして、宇宙全体には一〇〇〇億個もの銀河系に似た銀河があるのだから、地球のような惑星の数は一億かける一兆も存在することになる。そうだとすれば、生命はいくつも生まれ、地球上の人間のような知的生命体が多くあっても不思議ではないし、さらにもっと進化して宇宙旅行に乗り出している生命体だってあるだろう。にもかかわらず、地球に宇宙人がやってきた痕跡がないのはなぜだろうか？ という問いかけがあった。

⑨ このフェルミのパラドックスに関して、あり得る解答は、

① 知性を持つ生命体は簡単に生まれず、私たちは宇宙における唯一の存在である、

② 宇宙は巨大なので何千光年と離れた地球に到達できない、

③ A、

④ 知的文明の寿命は短から宇宙旅行に乗り出す前に絶滅した、
という四つになるだろう。そして、科学者が持つ意見のほとんどは②(又は④)である。生命はそう特殊なものではなく、条件さえ整えば宇宙にありふれているだろうから①は否定できる。③は②の変形バージョンで、長大な宇宙旅行をしなければならないことを見越して、そもそも出発しないと考えるのだ(さらに、せっかく地球に到達したのだが、とてもレベルが低いので留まる価値がなく、そのまますぐに飛び去ってしまったという可能性も否定できない)。④は、高度な知的文明を築いたとしても、その文明の寿命が短ければ、私たちと同時代に生きているという保証がないということである。知的宇宙人が生まれても宇宙の年齢に匹敵するくらい長続きしなければ、同時代を生きることにはならないのだ。ところが、宇宙は一〇〇億年以上続いてきたのに対し、種はいくら長くても五〇〇万年くらいで絶滅したらしいから、とても互いに遭遇しそうにはないのである。

⑩ 一般に市民は(SF小説に慣らされているためか)、宇宙の大きさに関する実感が無い上に、宇宙旅行は簡単であると考えている。しかし、私たちに接触できる時代に生きている宇宙人の数を計算してみると、どんなに近くにあったとしても地球から五〇〇〇光年は離れている。光速で飛行したとしても五〇〇〇年かかるのだから、とても生き長らえて宇宙旅行が続けられるはずがない(物体の速度には光速の壁があることは厳然たる物理の法則であり、光速以上に飛べる宇宙船はまさにSFでしかない)。それだけでなく、光速近くの速度で飛行するロケット

トはたやすく実現できそうに思われそうだが、そう簡単ではないことも科学者の常識である。現在の人類が手にしている技術では、せいぜい光速の一万分の一までしか宇宙船を加速できていない。原理的に考え得る可能な技術が実現できたとしても（実際には実現できそうにないが）、光速の一〇分の一程度が限度だろう。それでは五万年もかかるから宇宙旅行はとても不可能だと誰にもわかるはずである。科学者が宇宙人の乗り物としてのUFOを信じないのは、以上のような理由のためなのだ。

（池内 了『科学と人間の不協和音』による 問題作成のために本文を一部変更したところがあります）

- ※1 きらい……………けいこう傾向。
- ※2 C・P・スノー……………イギリスの物理学者および小説家。
- ※3 シェイクスピア……………イングリランドの劇作家、詩人。
- ※4 すう勢……………物事のなりゆき。
- ※5 オルテガ・イ・ガセット……………スペインの哲学者。
- ※6 弾劾した……………（不正や罪を）ついきやう追及した。
- ※7 齟齬……………意見や事などが、くいちがって、かみ合わないこと。
- ※8 はやぶさ……………しょうわくせいなんさき小惑星探査機。二〇一〇年、小惑星「イトカワ」の表面物質を地球に持ち帰ることに成功した。
- ※9 乖離……………離れていること。へだ隔たりがあること。
- ※10 リテラシー……………特定分野の正しい知識。
- ※11 涵養する……………水がしみこむように自然に養い、育てること。
- ※12 パラドックス……………一般に真理と認められるものに反する説。

問一 ――部①「理系人間はシェイクスピアを知らず、文系人間は熱力学の法則を知らない」とありますが、これについて以下の各問いに答えなさい。

（i）この表現が意味していることとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 文系の人間も理系の人間も、自分の分野にしか精通していないことを誇りに思っており、それが今日の文系と理系の亀裂の原因となっている。
- イ 文系と理系の両方を学ぶことができる教育体系が学校教育に整っていないため、人々は文系と理系のどちらかしか学べない状況になっている。
- ウ 自らの専門外の分野に関しては全く興味を示すことがなく、これまで学習してこなかった、ということが文系と理系のどちらにも起こっている。
- エ 文系人間が理系分野に関心がないのと同じように、理系人間も文系分野に関心がなく、両者の間にすでに修復不可能な深い溝が存在している。

(ii) ここで筆者はなぜ「C・P・スノー」の指摘を引用したと考えられますか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 理科離れの進行を食い止めてしまうと、それにより今度は文系科目を苦手とする人々が増えてしまうということを読者に示すため。
- イ 文系分野と理系分野の溝は深く、理系分野を軽視する風潮は二十世紀から現代まで続いているということを読者に伝えるため。
- ウ 近い将来、文系分野を専攻する人間が優遇される社会になるというスノーの予測が現実となったことを読者に確認させるため。
- エ 理科離れが今後更に深刻化し、近い将来、理系分野を全く重要視しない社会が訪れる可能性があることを読者に提示するため。

問二

I Ⅲ に当てはまることばとして適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

- ア もっとも イ しかし ウ なぜなら エ だからといって

問三

——部②「科学の振興と言えど誰も拒否できず、王様のような態度で世の中を見つめる科学者の野蛮性を弾劾したのである」とありますが、「王様のような態度で世の中を見つめる科学者の野蛮性」とは科学者のどのような態度のことをいいますか。次の文の□に合うように、本文中のことばを用いて五十字以内で答えなさい。

科学者の態度のこと。

問四

——部③「日暮れて道遠し」とありますが、この表現のここでの意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 文系分野と理系分野の両方の性質を持った、これまでにない新しい学問体系を学べるようになるには、まだ時間が掛かりそうだとすること。
- イ 理系分野の知識や考え方が、法律や経済や歴史などの文系分野の職業を手助けできるようになるには、まだ時間が掛かりそうだとすること。
- ウ 科学の祭典やサイエンス・フォーラムなどをきっかけにして、多くの市民の興味が理系分野に向くには、まだ時間が掛かりそうだとすること。
- エ 文系人間も理系人間も互いの分野の違いを明確にした上で、両分野を横断して物事が考えられるようになるには、まだ時間が掛かりそうだとすること。

問五

A

□に当てはまるものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 長距離の宇宙旅行を可能にする技術の開発に骨が折れる
- イ どの地球外文明も宇宙旅行は骨折れ損だとの判断を下した
- ウ どの地球外生命体にとっても地球の環境は骨身にこたえる
- エ 他の銀河系への宇宙旅行は骨身を削る苦労を重ねなければならない

問六

大宮開成中学校の生徒が「宇宙人と遭遇することは可能なのか」ということについて話し合いました。次の会話文の□に当てはまることを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

大場さん 現在の科学技術で宇宙に行くことはすでに可能なのだから、いつかは宇宙人と遭遇できるかもしれないね！

宮沢さん

でも本文では、科学者は宇宙人と遭遇することは

ア ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

(五字)と考えているよ。何千光年と離れた宇宙

宇宙のいると思われるところへ行くには光速で移動する必要があるけど、

[illegible]

に及ぶ速さは出せないみたい。

開藤さん　そうみたいだね。私たちも含めて科学者ではない一般の人々は、宇宙に対して誤った考えをもつてしまっているから、

[illegible]

工

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

(十字)だと想像してしまっているんだね。

成田さん
そうだね。これは本文で述べられている、大人から若者まで理科離れが進行した結果の一つなのかもしれないね。私も

問七

本文冒頭ほうとう部「若者の理科離れが言われるようになって久しい」とありますが、筆者は、人々がどうなることで「理科離れ」の現状は克服できると考えていますか。本文中のことはを用いて五十字以内で答えなさい。

今までは簡単に宇宙旅行に行けて、いつかは宇宙人と会えるのかなって思っていたけれど、SF小説に出てくるような技術は簡単に出来るものではなく、今の科学技術には限界があるということを正しく認識することが大事なだと分

かつたよ。

問八 この文章の表現や構成に関する説明として適当なものを、次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

- ア ①段落で文系人間が増える反面、理系人間が減っていることを説明し、②・③段落でその原因を二人の学者の意見を引用しながら説明している。
- イ ④段落・⑤段落の「とはいえ」のあとにはどちらも共通して、それまでに書かれた内容に反したことが現実起こっていることが続いている。
- ウ 一般人と科学者の考え方のちがいについて論じるために、⑦段落からはそれまでに書かれていた内容とは全く異なった話の切り口から論じている。
- エ ⑧段落では筆者が宇宙人との遭遇は現実的に不可能なのかという問題提起をし、続く⑨・⑩段落で科学者の具体的な意見を示して解決をはかっている。
- オ ⑩段落では、（ ）を使って直前に書かれた内容を後からくわしく説明することで、読者が宇宙旅行の難しさを想像しやすくしている。
- カ 文末に「くだろう。」という表現を多く用いることで、筆者がこれから起こると予測していることを読者に提示している。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

木島悟はサッカー部に所属している高校二年生である。サッカー部ではすでに多くの三年生が引退し、二年生がレギュラーとして試合に出場しているが、悟はポジションが同じ三年生の本間という先輩がまだ引退していないため、レギュラーになれていなかった。また、木島は日頃から人物の絵を落書きすることがよくあったが、美術の授業でクラスメイトの村田みのりの人物画を描いて以来、村田のことが気になっている。以下は木島が同じサッカー部に所属している友人の田代やサッカー部でキャプテンを務める進藤たちと、行きつけのカフェ『ハーフ・タイム』で話をしている場面である。

「まあね、だんだん上がってきたよね」

進藤は陽気に偉そうにしゃべった。

「調子さア、俺もチームもさア、俺らがしっかりしないとね、前から出てた二年がさ」

田代が深くうなずき、最近プレーのキレの良くなった前からのレギュラー同士は目と目をがっちり見交わした。

毎日の紅白戦と週末の練習試合を繰り返し、少しずつチームは落ちついてきた。まだイレブンの呼吸が合うってとこまでいかないけど、各ポジションが何とかそれっぽい動きになった。『ハーフ・タイム』での進藤たちの口数も増えた。俺一人がカヤの外だった。

「キャプテンは慣れてきた？」

似鳥ちゃんはからかうように尋ねた。常連の高校サッカー部のガキどもがへこんでいようがつけあがっていようが、似鳥ちゃんはいつの日も変わらずに淡々としていて柔和だ。弱点をつかれて、進藤は大げさな身振りでカウンターにガクッとくずおれた。

「早く出てくくんねえかなあ。もう、うっとうしくてさ。こいつもかわいそうだし」

進藤に同情されて、俺はちよつと気持ちが固くなるのがわかった。みんなが俺に同情するのは前からのことだけど、前と今では状況が違っている。前の俺はありふれた不幸で、今の俺はスペシャルな不幸だ。

でも、似鳥ちゃんはずいぶん同情した顔つきにならなかった。冷たいくらい涼しい表情でふうんと聞き流していた。俺に向けた目は親密

な感じがした。励ますというより理解するという感じ。いやなことがあっても嬉しいことがあっても、似島ちゃんはすごく敏感にニュアンスを悟ってしまうんだろうなと思う。でも、わかったって顔は絶対にしないんだ。そういうとこ、いいよな。

① 俺は固まった気持ちがふっとほぐれて楽になっちまって、絵が描きたいと思った。

(中略)

ここんところ、よく絵を描いてる。

簡単なスケッチ風なヤツ。

村田を描いてる。

② 授業中。休み時間。家で一人の時にも。

学校じゃ、いつも、目が勝手に村田を探しちゃう。教室、廊下、階段、体育館、美術室。教室では、村田は俺の斜め後ろの席だから、振り向けば見られるんだけど、かえって近すぎてさ、目が合えば何か話しかけなきゃいけない感じになるし、まさか「見ていい？」とも聞けねえし。やりにくいよ。女の子ってのがさ。

なんか噂みたいになってるし。前に美術の授業で、追い出された俺を追いかけてきた時から、村田が俺を好きだって噂になってるんだよ。村田は否定してるみたいだけど。チガウって俺も思うけどさ。俺のほうも、進藤に「あいつ好きなの？」とかマジで聞かれて困ってる。

(中略)

俺はいいかげんな奴だから、噂は鼻先で笑い飛ばして、こそこそと落書きを続ける。たまに、うっかり村田と目が合ってたじろぐ。村田は、いつも毅然としてる。誰にからかわれても、俺にこそそそ見られていても、さっぱり愛想のない顔でピンと背筋を伸ばしている。村田の中には、簡単に目に見えない特別な何かがある。そいつは、到底俺の手に負えないってわかってて、でも、強烈な磁力でひきつけられるように、そっちに向かってしまう。描きたい。

(中略)

部活が終わって、いつものメンツでだらだらと校門に歩いて行く時、村田がそばを通っていった。あいつは部に入っていないから、こんな時間まで学校にいるのは珍しかった。期末前だし、図書館にでもいたんだろうか。

一人だった。いつもの眼鏡の友達は一緒じゃなかった。村田は一人でいても、寂しそうに見えない珍しい女の子だった。俺の後ろからすぐ脇を通って、振り向きもせずに追い越していく。進藤に脇腹を小突かれた。「なんか言ってやれよ」とでっかいささやき声で耳打ちされた。俺だって、サヨナラくらいは言いたいんだ。

進藤と森川が何かひそひそしゃべっていて、いきなり連中は二〇メートル走のように猛然とスタートを切った。待てよ、と言う暇もなかった。チクショウ、体力残ってやんの、四人とも。俺は見事においてけぼりを食って、なんだか走って追いかける気力もなくて、ゆるい溜め息をついた。

連中のダッシュに巻き込まれる形になって、村田は驚いたように足を止め、駆け去っていく四人の後ろ姿を見ていた。それから、ゆっくりと振り向いた。ああ、いいアングルだな。背景が校門で、空はまだ薄明るい。木星だか金星だかデカい一番星が出ていた。

目が合って、村田はまだ立ち止まっていたから、俺が追いつく形になった。

なんか言わなきゃな……。

「俺、絵、描いてるんだよね。村田さんの絵さ」

いきなり切り出して、

「でも、駄目だよ。うまく描けない」

いきなり愚痴った。

「なんで？」

と村田は聞いた。落ちついた感じの声だった。

「わかんない。むずかしい」

俺がつぶやくと、

「前も言ってたね」

と村田はぽつんと言った。なんだか悩んでいるような顔に見える。俺の絵のことで

A

悩んでくれてるように見える。

信じらんねえけど、でも、村田なら、そういうこともアリかもしれない。憂鬱そうな顔のままで、村田がすたすた歩き始めたから、俺も半

歩くらい遅れて続いた。

「で、俺さ、見ちゃうんだよね、村田さんのことさ」

後ろから、悪事を告白でもするかのように声をひそめて俺は言った。

「顔とか動作とかさ、知りたいじゃん、色々。——知ってた？」

半歩前に行く村田の頭がコクンと下がってうなずいた。村田は唐突^{とうとつ}に足を止めて、俺を振り向いた。ちよつとまどつたような目。それから、急に何かを切り捨てたようにきっぱりした顔つきになった。

「もつと描いたら？ 絵をたくさん」

と村田は言った。

「もつと」

言葉を選ぶように間を取って、

「本気で」

と強く言った。

④ドキリとした。本間さんに怒られているような気がした。

——マジメにやれよ！

⑤俺はそんなに不真面目なんだろうか。俺程度にタラタラ生きている奴はいっぱいいるはずじゃねえか。

「本気って、ヤじゃない？」

俺が聞くと、村田は理解できないという顔つきになった。

「こわくねえ？ 自分の限界とか見ちまうの？」

それでも、まだ、俺は言っていた。

「俺、そんなの見ちまったら、二度と立ち直れない気イするよ」

(中略)

村田は非常に真面目な顔で俺を見ていた。何か言葉を探しているように見えて、それを俺はなぜだか聞きたくない気がして、またしゃべりはじめた。

「俺ね、ずっとサブやってるの」

独り言みたいに言葉が口からこぼれ出る。

「控^{ひか}えの選手さ。ポジション、キーパーなんだよ。あ、サッカー部ね……」

村田は前を向いたまま小さくうなずいた。

「三年にすぎえうまい奴がいて、もうほんと引退なんだけど、俺が頼りないからって、やめねえんだよ。で、俺、ずっと、そいつを見てるわけ。とにかく見てるの。見るしかないの。でも、今、本気で見てるんだ。初めて本気で見てる」

「好きなんだ？ サッカー」

少し意外という風に村田は聞いた。

「見えない？」

「楽しそうに見える。うらやましいくらい。でも……」

⑥「でも」の言葉、そこで切ってしまった言葉の続きを俺は知ってるような気がした。知りたくなくて知るまいとしている言葉なんだ、ずっと、たぶん。

「いいな、木島クンは」

村田はボソリと言った。

「何がいのサ」

俺もボソリと言った。

「やれることが、いっぱいある」

「やれてないってば」

「やってるじゃん」

村田はきつい調子で言った。

「私は何もしてない。限界が見えるようなこと、何もできない」

俺は黙っていた。

村田も口をつぐんだ。かなり長いこと黙っていてから、

「でも」

と言いだした。少し照れ臭そうに

B

「何が好きかだけは、わかってるんだ」

「何サ？」

「絵だよ」

村田は簡単に答え、俺は一瞬息を飲んだ。

「絵が好きなんだ。すっげえ好きなんだ。描けないけど。見るだけなんだけど」

村田の素直な声が、なぜか鋭くキリキリと胸に食い込むような気がした。

(佐藤 多佳子『黄色い目の魚』による 問題作成のために本文を一部変更したところがあります)

※1 紅白戦……………同じチームの中で赤組と白組の二組に分かれて行う試合。

※2 イレブン……………サッカーの試合に出る十一人の選手。

※3 似鳥ちゃん……………『ハーフ・タイム』の店員。

※4 くずおれた……………崩れるように倒れること。

※5 早く出てっくんねえかなあ……………三年生の本間に対する発言。

※6 メンツ……………顔ぶれ(ここでは進藤や森川のこと)。

※7 期末……………期末試験。

※8 アングル……………角度、視点。

問一 || 部a「淡々と」・b「たじろぐ」・c「猛然と」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

a 「淡々と」

- ア 表情がなく、不愛想に
イ こだわりがなく、いい加減に
ウ しつこくなく、冷静に
エ 温厚で、ゆったりと

b 「たじろぐ」

- ア 動揺してひるむ
イ 緊張して我を忘れる
ウ 驚いて冷や汗をかく
エ 慌てて目をそらす

c 「猛然と」

- ア 足取り軽く
イ がむしゃらに
ウ 気合いを入れて
エ 激しい勢いで

問

——部①「俺は固まった気持ちがあつとほぐれて楽になつちまつて」とありますが、どういふことですか。次の文の□に当てはまることを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

以前からサッカー部の
☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ア
 (五字)としてプレーしている進藤と田代との話に入れず、自分だけが

イ

 (四字) にいるような気がしていたところで、進藤にいまだに
 ア

 (五字) になれていないことを

(二字) されて、気持ちが固くなったが、似鳥ちゃんがその話を聞いても
 (五字) でいてくれて、なお

かつ自分を理解してくれているような 才
(二字) さを感じる視線を送ってくれたことで心に余裕が生まれたということ。

問

——部②「学校じゃ、いつも、目が勝手に村田を探しちまう」とありますが、木島がこのような行動をとってしまったのはなぜですか。

次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

問四

記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

どんな時もまっすぐ
ア

(七字) 何事にも動じない態度でいる村田には

イ

(十二字) ものがあると思っており、自分には

ウ

(六字)

と分かってはいるが、どうしてもその

イ

(十二字) ものを持つ村田を

エ

(四字) と思ってしまうから。

ア 目を凝らして
イ 眉を寄せて
ウ 胸を弾ませて
エ 目を細くして
オ 涙に暮れて
カ 顔をうかがって

問五

——部③「急に何かを切り捨てたようにきつぱりした顔つきになった」とありますが、このときの村田の心情の説明として考えられる最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 木島が自分のことを見て自分の絵を描いていたことは知っていたが、初めて木島本人からその話を聞いたので、木島が嫌な思いをするかもしれないと思いつつも、自分以外の絵をもっとたくさん描いてほしいという自分の正直な気持ちもきちんと伝えようと、覚悟を決めている。

イ 木島に見られているということは以前から気づいていたが、改めて木島本人から直接言われたので、自分の話を聞いてどう思うか分からないと不安に思いつつも、木島はもっと真剣に絵と向き合うべきだという自分の考えを正直に伝えてみようと、決意している。

ウ 木島が自分の絵を描いていることは知っていたが、自分の絵がうまく描けないことで木島が悩んでいることは知らなかったので、意見を聞いてくれるか分からないと思いつつも、一日に描く絵の量をもっと増やしたほうがいいというアドバイスを木島に伝えようと、心に決めている。

エ 以前から木島に見られていたことは知っていたが、はっきりと本人から告白されたのは初めてだったので、木島が自分の話を聞いて不快な思いをするかもしれないと気がかりに思いつつも、絵とサッカーの両立を頑張ってほしいという自分の気持ちも告白してみようと、決心している。

問六

——部④「ドキリとした」とありますが、このときの木島の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 村田に絵をもっと本気で描いた方が良いと言われ、本間さんにも同じようなことを言われた気がして、サッカーも絵も真面目にやってきたつもりだったが、周りの人からはそう見えていなかったと知り、衝撃しょうげきを受けている。

イ 村田に言われたことはサッカー部で本間さんにも言われたことがあるような指摘で、自分でもサッカーや絵に限界が見えるほど真剣に取り組めていなかったという自覚があったので、動揺どうぶしている。

ウ 自分にとって憧れの存在である本間さんと村田という二人の人物に同じような指摘をされて、自分が何事にも中途半端にしか取り組んでいなかったということに初めて気づき、頭が真っ白になっている。

エ 自分以外にも不真面目な人はたくさんいるのに自分にだけ厳しい村田や本間さんに対して、どうして自分は絵もサッカーも本気で取り組んでいるのにそれを分かってくれないのかと、混乱している。

問七

——部⑤「本気って、ヤじゃない？」とありますが、なぜ木島は本気になることが嫌だと思っているのですか。本文中のことを用いて四十字以内で答えなさい。

問八

——部⑥「言葉の続きを俺は知ってるような気がした」とありますが、村田の「言葉の続き」がどのようなものだったかについて大宮開成中学校の生徒がそれぞれ自分の意見を発表しました。本文内容に最もそくしたものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 大場さん

僕は「でも、本気でやっているようには見えない」って言おうとしたんだと思うよ。だって木島は直前の村田との会話で、「本気って、ヤじゃない？」って言っていたじゃん。それを聞いた村田は木島がサッカーも本気でやっているように思えなかったんだよ。

イ 宮沢さん

私は「でも、先輩より上手くなるうとしているようには見えない」だと思うよ。だって木島は直前にレギュラーの先輩の話をしているけれど、その先輩をただ見ることはできないって言っていたじゃない。村田には、木島が先輩よりもよくなるために努力しているようには見えなかったんだと思うよ。

ウ 開藤さん

僕は「でも、好きでやっているようには見えない」だと思った。だって直前で木島がサッカーの話をしているのに対して村田は「好きなんだ？ サッカー」って驚いていたじゃないか。サッカーをするのは楽しそうには見えるけれど木島がサッカーを好きだというようには見えなかったんだと思うな。

エ 成田さん

私は「でも、レギュラーになりたいようには見えない」だと思ったわ。だって木島は直前の村田との会話で「サブ」とか「控えの選手」という言葉を使っているじゃない。だから村田には今の木島が本気でレギュラーになりたいと思っているようには見えなかったんじゃないかな。

問九

——部⑦「なぜか鋭くキリキリと胸に食い込むような気がした」とありますが、なぜですか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 村田が、自分の好きなことを隠さず率直に表現してきたことで、自分は今まで絵を描くことが好きだという気持ちに正直になれず、結局絵もサッカーも中途半端にしか取り組めていなかったのだからということを変更して思い知らされたから。

イ 村田が、絵を見ることが好きだということをいとも簡単に告白してきたことで、自分は絵とサッカーの両立がしたいという気持ちに嘘をついて、結局どちらにも本気を出せていなかったのだということに初めて気づいたから。

ウ 村田が、なんの迷いもなく絵が好きだという気持ちを言ってきたことで、自分は村田と違い、絵やサッカーが好きだということを実感したから。

エ 村田が、絵が好きだという正直な気持ちを隠さずに告白してきたことで、自分も絵を描くことが好きだということをずっと村田に伝えたかったのに自分の気持ちをこまかし続けて、結局伝える機会を逃してしまっていたのだと気づいたから。

問題は以上です。



* 2 1 1 1 0 1 1 0 0 1 K *

第一回入試

令和三年 入学試験解答用紙

[illegible][illegible]